



イラン人学習者が日本語の受身文を学習する際の誤用分析



Farzaneh Moradi*

Assistant Professor of Japanese Language and Literature, University of Tehran,

Tehran, Iran

Email: farzaneh.moradi@ut.ac.ir

概要

外国語を学習する過程を妨げる一つの要素は誤用を犯すことである。言語学習の過程においては、誤用とエラーは当然のごとく生じるものであるが、大事なのはそこから誤用とエラーに係る事象を認識し、解決策を立てることにある。外国語教育では要因を見つけ、再発を予防するための誤用分析は原則かつ不可欠となっている。ペルシア語母語話者が日本語を学習する際、日本語のいくつかの文法項目において、戸惑ったり、誤用を犯したりする。その一つが受身文である。日本語では受身文は頻繁に使用される項目であるため、正しく使用することが重要である。それ故、本稿では、まず日本語の受身文の特徴を説明し、次に、アンケート調査を通して、ペルシア語母語話者が日本語の受身文を学習する際の問題点を明確にして分析を行っていった。その結果、イラン人学習者が二種類の言語間誤用と言語内誤用を犯していることが明らかとなり、言語間誤用における分析結果では、ペルシア語母語の干渉による「目的語を主語の位置で使用した受身文」、「行動の主体の削除」、そして「ペルシア語受身文の統合構造の日本語への流用」が誤りを生じさせる主たるものと判明した。また、受身文を類似する文法形式から判別できないこと、受身文の適切な助詞を認識できないこと、そして、三項から成る受身文を作れないことが、主な言語内誤用であることが明らかになった。

DOI: 10.22059/jflr.2020.301601.726

© 2020 All rights reserved.

ARTICLE INFO

Article history:

Received:

5th, May, 2020

Accepted:

20th, June, 2020

Available online:

Summer 2020

キーワード:

誤用分析、受身文、言語間誤用、言語内誤用

Moradi, Farzaneh (2020). イラン人学習者が日本語の受身文を学習する際の誤用分析.

Journal of Foreign Language Research, 10 (2), 422-433.

DOI: 10.22059/jflr.2020.301601.726

* Farzaneh Moradi has been teaching Japanese Language for about 5 years.



An Analysis of Errors Committed by Iranian Language Learners of Japanese language in the Usage of Passive Form in Japanese



Farzaneh Moradi*

Assistant Professor of Japanese Language and Literature, University of Tehran,
Tehran, Iran

Email: farzaneh.moradi@ut.ac.ir

ABSTRACT

One of the factors that hinder the process of second language acquisition is the linguistic errors. Indeed, making errors in the process of language learning is a normal and predictable matter. However, the importance lies in being aware of these errors and finding strategies to rectify them. Analyzing the error in order to find its sources is considered as one of the essential parts of language teaching. During the process of teaching the Japanese language, students with different levels of proficiency commit errors in the use of passive sentences. Considering the frequent use of passive sentences in the Japanese language, the correct usage of it is of high importance. As the first step of our study, an overview of the structures and properties of passive sentences in the Japanese language is carried out, followed by field research for an investigation into the most common errors made by Iranian language learners when using these sentences. Interlingual errors revealed that the Persian language is the main cause of errors such as substituting objects for subjects, the omission of the doer of the action and errors in the use of syntactic structures due to overgeneralization of grammar rules between Persian and Japanese languages. Examples of intralingual errors include failure in differentiating between passive sentences and similar grammatical forms, misuse of postpositions and errors in the making of three-component part passive sentences.

DOI: 10.22059/jflr.2020.301601.726

© 2020 All rights reserved.

ARTICLE INFO

Article history:

Received:

5th, May, 2020

Accepted:

20th, June, 2020

Available online:

Summer 2020

Keywords:

Error analysis, passive sentences, intralingual errors, interlingual error

Moradi, Farzaneh (2020). An Analysis of Errors Committed by Iranian Language Learners of Japanese language in the Usage of Passive Form in Japanese. *Journal of Foreign Language Research*, 10 (2), 422-433. DOI: 10.22059/jflr.2020.301601.726

* Farzaneh Moradi has been teaching Japanese Language for about 5 years.

1. 序論

近年、世界では日本語の学習に興味を持つ人が大幅に増えている。イランでも、日本語を学ぶことに興味を持つ人が増えているが、日本語とペルシア語は類型論的にまったく異なる構造を持ち、語族の異なる言語であるので、ペルシア語母語話者は日本語を学習する際に、日本語のいくつかの文法項目において、戸惑い、そして誤用を犯したりする。その一つが受身文である。日本語教育の現場においては、受身文を初級レベルの後半で学習するものの、上級レベルまで進んだ学習者でさえ、この受身文を使いこなしているとは言えず、誤用を犯している現状がある。エラーの原因を発見し、そして分析することは、その過ちを減らし、無くしていく上で重要な役割を果たすことができると思われる。Kamali (1394)によれば、誤用分析の重要性は誤用が貴重なフィードバックであり、それによって教育上の問題点が認識できるとしている。

本稿では、まず日本語の受身文の特徴を簡単に考察する。そして、アンケート調査の結果に基づいて、イラン人学習者が日本語の受身文を使用する際の誤用分析を行い、その発生源によって生じる「言語間誤用」、つまり、母語のペルシア語の干渉によって生じる誤り、そして「言語内誤用」、すなわち、目標言語の日本語の学習過程で起きる誤用に分類し、考察を行う。本研究では、1. イラン人学習者が日本語の受身構造を学習する際、陥りやすい誤用はどういったものがあるのか。2. その誤用を減らすのに、どんな方法があるかについても考察をしていくこととする。

2. 研究の理論的基礎

誤用分析研究の始まりは数十年前に遡り、Corderという言語学者によって初めて提唱された。誤用分析理論の信奉者は、外国語学習者の母語の構文ではなく、外国語学習者自身によって目的言語で生成される構文や文章を評価する必要があると信じている。そのため、学習者自身の言語の陥る系統誤差が注目を集めた。Corder (1967)によると、学習者が陥る誤用は、考慮すべき領域を特定するように教師の導きになる。さらに、誤用を減らしたり、無くしたり、また、将来の適切な教科書を作成するように誤用発見とその分析は効果的であり得る。Keshavarz (Corder, 1975, 101, 199により)は、言語エラーを、学習者が新しい言語を識別しようとする試みから生じる言語学習の避けられないこととして見なしている。そこで、本節では、アンケート調査で判明した誤用の事例をCorderの理論に基づいて検討・解説する。誤用は発見された後、起源によって「言語間誤用」と「言語内誤用」に分類し、考察する。そこで、本稿では、アンケート調査により認識された誤用例をCorderの理論に基づいて分析する。Corderの分類によると、エラーの原因の1つは教育的方法によるものであるが受身文を教える際の様子を見るにはさまざまな制限があるので、このタイプのエラーの研究は省略され、「言語間エラー」と「言語内エラー」の2つのカテゴリで学習者の誤用分析を行う。

3. 先行研究

ここ数年、日本語とペルシア語の受身文に関してはいくつかの研究が行われてい

る。五十嵐（2007）、（2008）、（2017）とモラデイ（2009）、（2016）はペルシア語と日本語の受身文の対照研究を行っている。五十嵐（2007、2008）はペルシア語では日本語の「間接受身」に相当する受身がないと述べ、ペルシア語では受身形があるにもかかわらず、能動文を使用する傾向がより強いと述べている。本研究の筆者も、日本語とペルシア語の受身文の対照研究を行うとともに、両言語における受身文の使用率を調査したところ、同様の結果を得ることとなった。その研究の結果によれば、ペルシア語では日本語の「間接受身」に相当する正確な表現がないことに加えて、両言語は日常会話での受身文の使用率に大幅に異なり、日本語の会話での受身文の使用率は7.2%、ペルシア語では0.4%であった。したがって、イラン人学習者の誤用の原因の一つはここに起因するのではないかと思料される（モラデイ、2009、39-58）。モラデイは別の研究で、ペルシア語を母語とする日本語学習者に対して、日本語の受身文に関するアンケート調査を行うことによって、ペルシア語母語話者の誤用の特徴について分析を行った。その結果によれば、ペルシア語母語話者の多くの誤用は母語のペルシア語の受身構造に影響を受けているということである。また、五十嵐（2017）も別の研究で、ペルシア語母語話者における日本語受身文の誤用分析を行っており、ペルシア語母語話者の誤用は、所有的対象、空間的対象移動動詞に多く起こり、これらの動詞が受身形になりにくいという特徴を持つペルシア語の干渉が働いたものためであると述べている。

4. 研究方法

本研究の調査方法は得られたデータの解析に基づいている。イラン人の日本語学習者の学習上の問題点とエラーの原因を見つけるように、まず日本語の受身文の構造と特徴を記述する。また、誤用の発見がその修正と評価の主要な前提条件であることから（Doostizadeh、Forghani Tehrani、2011、53）、誤用の発見とその分類及び分析を行うこととする。

本研究ではアンケート調査を通して、ペルシア語母語話者の日本語学習者の受身文に関する最も一般的なエラーを発見する。調査は自由回答形式の質問で、対象者は44人の学生であった。平均年齢は20~25歳、男女比は男性16人、女性は28人であった。テヘラン大学日本語学科の3年生は17人、4年生は14人、テヘラン大学日本語学科を卒業したばかりの卒業生は13であり、日本語能力はほぼ近いレベルであった。

4.1 アンケート調査の問題と結果

アンケートの質問項目は三つに分かれる。問1では日本語の受身文において、適切な助詞を選択できるかを見るための質問である。助詞の部分为空欄にした受身文を提示し、適切な助詞を記入してもらった。

表1：日本の受身文の助詞選択に関する質問の正答数

質問番号	正答数（44人中）			
	カッコ1	%	カッコ2	%
1	31	74/45	設問なし	-
2	38	88/36	設問なし	-
3	13	29/54	設問なし	-
4	4	9/09	設問なし	-
5	39	88/63	設問なし	-
6	34	77/27	39	88/63
7	35	79/54	38	88/36
8	37	84/09	31	74/45
9	37	84/09	35	79/54
10	39	88/63	34	77/27

問2では、動詞の形態が類似する「受身」「自発」「可能」「尊敬」の中から、「受身」を判別できるかを見るための質問を行った。提示した問題文の中から「受身」の用例であると思うものを選択してもらった。

表2: 「受身」を「自発」「可能」「尊敬」の中から判別能力に関する質問の結果

質問番号	受身として選んだ数 (44人中) /%	
1 (可)	31	70/45
2 (自)	10	31/81
3 (受)	39	88/63
4 (尊)	13	29/54
5 (受)	26	59/09
6 (自)	39	88/63
7 (可)	13	29/54
8 (受)	31	70/45
9 (尊)	22	50
10 (受)	9	20/45

問3では、日本語の受身構文を作る際にどのような誤りを起こすかを調べる。特に、ペルシア語に存在しない日本語の間接受身文を、どのようにペルシア語訳するかを見るための質問である。提示した能動文(日本語)を受身文(日本語)に変換してもらった。

表3: 日本語の受身文を作るに関する質問の正答数

質問番号	正答数 (44人中)	%
1	39	88/63
2	14	31/81
3	42	95/45
4	27	61/36
5	18	40/90
6	42	95/45
7	23	52/27
8	35	79/54
9	24	54/54
10	27	61/36

5. 考察

寺村 (1982 : 212) は受身について、「

受身というのは、動作・作用の主体が、他の何ものかに働きかける場合に、動作主、つまり動きの発するところを主役とするのではなく、動きを受けるもの、動きの向う先を主役として事態を描く表現であるが、それが文法的に受動態と確認されるためには、一定の形態的、統語的、意味的特徴を具えていなければならない」と定義する。

すなわち、日本語では受身文は、有標の構造であり、その構造では主語は行為者ではなく、受動者及び受取人の目標としての役割を持っている。例えば、能動文の「太郎は次郎を殴った。」では、「太郎」は動作主として文章の「主役」となり、「次郎」は動きを受けるものとして目的語となるのに対して、その受身文、つまり、「次郎は太郎に殴られた。」という表現では、「次郎」は「太郎」から動作を受けているのに、受身文の「主役」とみなされる。

Noubahar (1993, 185) によれば、文章の動詞は能動形であれば、その文章の主体が主語であるが動詞が受身形であれば文章の主体が目的語と見なされる。したがって、日本語の受身文の主語は、ペルシア語の受身文の目的語に対応していると言える。

形態的特徴: 日本語の動詞は活用の観点から、次の三つのグループに分類される。寺村 (1982) は具体的に次のように分類している。

- 1.
2. 語幹が子音で終わる動詞 : shin-u
→ shin-are-ru
3. 語幹が母音 (i , e) で終わる動詞 :
sodate-ru → sodate-rare-ru
4. 不規則動詞 : suru → sare-(ru)
kuru → korare-(ru)

統語的特徴：日本語においては、「自発・可能・尊敬」の述語動詞「れる」「られる」の形で作られる受身形と同様の形式を持つものがあるが、述語動詞が受身の形態をとるのに加えて、受身文を作るには、「X ガ Y ニVーレル、(ラレル)」という統語的な特徴が必要な条件である。寺村(1982)の観点から、受身文は次の2つの形式に従う必要がある。

1. Xガ(ga) Yニ(ni) Vーreru、(rareru)
2. Xガ(ga) Yニ(ni) Zヲ(o) ～Vーreru、(rareru)

1番の形式は、「直接受身」および2番目の「間接受身」という文の構造を示している。この二つの構文では「X」は主語であり、「Y」、つまり、動作主に影響を受けている。2番のような構文では、「Z」は「Z」は「Xの何か」、つまり、「X」の身体部分であるか、所有物に属するものであるか、肉親、親戚や身内の者であるかでないといけない。「Z」が「X」に全く関係がなければ、間接受身文と呼ぶことは適当ではないと言える。

意味的特徴：意味の観点から見ると、日本語の受身文は「中立受身文」と「迷惑受身文」、若しくは「被害受身文」に分類できる。中立受身文と迷惑受身文の相違点を把握するため、以下の例を見てみよう。

1. 私は妹に殴られた。
2. 隣のホテルで立派なパーティーが行われている。

上記の1の例では、主語、つまり「私」は、「殴られる」という行為によって、被害・迷惑を被ったという意味があることから、「迷惑受身」、又は「被害受身」と呼

ばれているのに対して、2の例では、ただ、迷惑の意味が感じ取れず、「中立受身」と言われている。

6. 誤用の分類と考察

6-1. 言語間誤用

- **主語の位置で目的語を使用すること**
アンケートの3番目の質問で、日本語の能動文(10文)を受身文に変換してもらい、440件の回答のうち、291件は正答で、149件は誤りであった。そのうち19件、つまり16.81%が主語の位置で目的語を使用するエラーであった。以下はその問題の誤用事例である。

1. 田中さんは私の家の前に車を止めた。
→ 車が田中さんに私の家の前に止められた。
2. 裕ちゃんはお母さんに手を縛られた。
→ 裕ちゃんの手はお母さんに縛られた。

ペルシア語における受身文を作る三つの段階の一つは能動文の目的語がマーカーを失い、受身文の主語の位置に配置されることである。上記の例によれば、ペルシア語学習者は、母国語背景の影響により、ペルシア語の受身文のこの特徴を、日本語との受身文に対応させ、目的語である「車」と「裕ちゃんの手」を受身文の主語として使用している。

- **日本語の受身文における動作主の省略**

前述したように、両タイプの直接受身と間接受身では動作主が言及されており、文の主要な要素の一つである。一方、ペルシア語では非常に一般的に使用される受身

文の一つのタイプでは動作主が通常、言及されることはなく、基本的に、受身文は動作主が不明の場合、あるいは話し手の関心の対象ではなく、言及に値しない場合のみ使われる (Mahutian, 1997, 143)。以下の文章は学習者による誤用の例である。

1. 友達は招待状を送りました。→招待状が送られた。
2. 田中さんは私の家の前に車を止めた →家の前に車が止められた。

上記の誤用例では、動作主の「友達」と「田中さん」が省略され、ペルシア語の負の転移が起こっている。つまり、ペルシア語表記の特徴の影響から出てくるエラーであると思われる。アンケートの3番目の質問の回答の合計149のエラーのうち、このタイプのエラーの発生率は18.58% (21ケース) であった。

● 統語構造の使用に関するエラー

合計149のエラーのうち、回答の23% (26ケース) は、受身文の統語構造に関する誤用であった。その例は次のとおりです。

1. 友達は招待状を送りました。→招待状が友達に送られた。
2. すりが鈴木さんの財布をすった。→鈴木さんの財布がすりにすられた。

上記の誤用例では、能動文の目的語、つまり「招待状」と「田中さんの財布」は主語の位置で、受身文の主義「に」の助詞と主語の位置で、「友達」と「すり」と「に」の助詞とともに受身文の動作主の位置に使用されている。両方の文章は間違っている。なぜなら、「Xガ(ga) Yニ(ni) Vーreru、(rareru)」と「Xガ(ga) Yニ(ni) Zヲ(o) ~Vーreru、(rareru)」の形式に基づいて作られていないからである。ペルシ

ア語では、受身文を作る際に、能動文はマーカーを失うことによって、受身文の主語の位置に配置され、能動文の主語は受身文の主語の後に転送され、「be vasile-ye」、「tavasot-e」、「be dast-e」という助詞に指定される。要するに、両方の文章はペルシア語の受身文の統語的、意味的特徴に基づいて作られ、負の転移が発生していると思われる。

6-2. 言語内誤用

● 受身と自発の見分けに関するエラー

日本語における「自発」「尊敬」「可能」の表現の述語動詞は形態的に受身文に類似しているため、学習者にはこれらの表現の判別は困難となる。調査では「受身」「自発」「可能」「尊敬」の用例の中から「受身」を判別してもらった。その中から自発表現を受身文として選択した学習者の割合は最も多く、59.9%と50%であり、学習者の受身文判別に係る欠点を示している。

寺村 (1982 : 273) は、受身と自発の相違点と見分け方について、「その述語の表す事態を惹き起こしたものの存在が意識されているのといないのとの違いである」と述べている。つまり、受身文の中では動作主が存在するが、自発の表現では元々動作主が存在しない。寺村はさらに、受身文では動作主が言及されない場合について、受動表現でも、「動作主が～」となることがあるが、そのことが誰かによってなされた結果だということが受動表現には含まれ、自発表現にはそれがないと述べている。次の用例はアンケートに出た表現である。

写真を見て、家族が思い出された。

上記の述語の「思い出された」には動作主が存在せず、写真を見たことから自然

にそうになったという意味を持つ。それに対して、寺村が挙げている「歯が抜かれた」という例では、「抜く」という動作が、明示されない動作主によって実行されていることが含意されている。つまり、「抜く」という動作をした者を、文の要素として補充しようと思えばできるのであるが、自発表現ではそれができない。もう一つの相違点は、受身述語はどのような動詞からも作ることができるのに対して、自発は「見る」「聞く」「感じる」「思い出す」などの精神作用や感覚作用を表す限られた動詞しか用いることがない。このことについての知識の欠如のために、学習者は上記の間違いをしたようである。

● 受身と尊敬の見分けに関するエラー

自発表現の後、最も多いエラーは、受身文と尊敬の表現の区別に関連している。アンケートの文章の中から受身文として選ばれたのは31.81%と29.54%であった。尊敬の表現と受身文を見分け方を明らかにするため、アンケートの2つの文を比較してみる。

1. 洪水警報が茨城県水戸市に発表された。(受身文)
2. 先生はこの本を昨年執筆された。(尊敬)

上記の受身文では、主語に立つ「洪水警報」は、「発表された」という動作の対象となっているのに対して、尊敬の表現では、主語の「先生」が動作を行う主体となっている。つまり、主語と動詞の意味上の関係の違いが、受身と尊敬の顕著な違いである。さらに、受身文では、主語の位置に人間、物語、動物などの名詞を置くことができるのに対して、尊敬の表現では、「先生

」「社長」「部長」といった目上の人を示す名詞が多くの場合で用いられるという違いもある。

● 受身と可能の見分けに関するエラー

アンケート調査の回答では、受身文と可能表現の判別に関するエラーの割合が低かった。二つの可能形の文章はそれぞれ29.54%と20.45%受身文として選ばれていた。ここでは受身文と可能表現の見分け方を考察する。

1. 早めに図書館に行けば、日本語の本が借りられます。
2. 寝坊したため、日本語の本は既に借りられていた。

日本語では可能と受身は、「～れる／られる」を「～することができる」という言い換え表現で置き換えられるかどうかでも区別できる。もし文章の可能的の意味が保持されたら、その文章は可能表現を示すが、可能的な意味がない場合はその文章は受身文として取り扱われる。

● 助詞に関するエラー

日本語の受身文において適切な助詞を選択できるかを見るために、アンケート調査では問題として、助詞の部分を空欄にした受身文を提示し、助詞を記入してもらった。回答のうちで正答率が最も低かったのは正答が9.09%「から」と29.54%の「によって」であった。日本語の受身文では、主に動作主は「に」という助詞と使われるが、代わりとして「から」や「によって」が使用される場合もある。しかし学習者は受身文の助詞の規則性を完全に把握していないため、この種の誤りに陥ったようである。

★ 受身文における「によって」が使われる場合

次の用例は、アンケート調査に出題した文章で、空欄に「によって」を記入する必要があったものである。

あの名画はモネ（ ）制作された。

この用例では、「制作する」という出現を表す動詞、つまり、ある動作の結果としてそれまで存在しなかったものを新たに作り出すことを表す動詞が使われている。一般的に言って、「書く」「建てる」「制作する」のような意味特性を持つ動詞が使用される場合は、受身文の動作主は「によって」で表される。「に」と「によって」の使い分けについて、益岡（1987）は Kuroda（1979）の研究を参照し、動作主を「に」で表すのは、受身文で主語に「動作主の影響」が及ぶ場合には、動作主のマーカに「に」が使われる。それに対して、主語が動作主の働きかけを受けない場合には、「によって」が使用され、対応する能動文と同義的である。

1. 娘は虫に刺された。
2. 源氏物語は紫式部によって書かれた。

上記の1の例では、主語つまり「娘」は動作主である「虫」の影響を受ける。それに対して2の用例では、主語「源氏物語」は動作主「紫式部」の働きかけを受けない。実際に、「源氏物語」「紫式部」の「書く」という行為の結果として生まれたのである。このような場合には、「によって」が用いられる。また、上の例でいうなら、能動文「紫式部は源氏物語を書いた」と受動文「源氏物語は紫式部によって書かれた」は、意味的に完全に同義である。しかし、

「犬が娘に吠えた」と「娘は犬に吠えられた」の場合、完全に同義とは言えない。後者の受身文は「娘」が「犬に吠えられる」ことで、何らかの感情的作用を受けたことを示唆している。その意味で、「によって受動文」は動作がより中立的であるといえる。

★ 受身文における「から」が使われる場合

次の用例は、アンケート調査に出た文章で、空欄に「から」を記入する必要だった。

その優しいおばあちゃんは隣近所の住民（ ）慕われている。

村木（1991）は「から」というマーカは、主語が人間を表す名詞であり、動詞が人間の態度や感情・感覚・言語活動などを表すもの、あるいは作品や情報の授受を表すものである場合に使われると述べ、さらに、多くの場合に「から」は「に」と交替させることができると述べている。鈴木（1978、96）はこの点で村木に同意するが、「から」に置き換えた場合、「中には不自然さが感じられるものもある」と正しく指摘している。そして、人間も表す名詞・代名詞、それに「学校」「警察」「会社」「世間」などの擬人化できるもの場合には、「に」は不可であり、「から」のみとしている。

● 三項から成る受身文に関するエラー

以下の文章はアンケート調査で提示した用例であり、能動文を受身文に変換してもらった。その前の文章は、学習者が作った文章である。

1. 仲人夫人は花嫁の手を取った。→花嫁は仲人夫人に手を取られた。

2. 花子さんがお父さんのパソコンを壊した。→お父さんのパソコンが花子さんに壊された。

上記文章における能動文と受身文の語順を図式化すると次のようになる。

AはBのCを…する。→(能動文)
BはAにCを…される。→(受身文)

上記の図式に基づいて、能動文では、動作対象Cの所有格であったBを受身文の主語にし、動作対象Cは受身文でもそのまま「を格」を取り続け、述語動詞は受身の形態を取る。問題1と問題2では「花嫁の手」「お父さんのパソコン」の全体ではなく、その所有主体のB、つまり、「花嫁」と「お父さん」のみを受身文の主語として立てなければならない。そして、「手」と「パソコン」に目的語の位置が与えられる。能動文で主語であったAは受身文では、動作主として現れる。すなわち、受身文は主語、動作主、動作対象と受身形態の述語動詞という要素からなる文章である。このタイプの日本語の受身文の複雑さは、学習者の多くのエラーの主な原因のようである。

ペルシア語では、上記のような受身文を作る際の動作対象とその所有格が共に主体として扱われる。すなわち、ペルシア語の受身文は主体、動作主と受身形態の述語からなる構文である。しかし、学習者は目的言語のペルシア語の構造を従い、動作対象とその所有格を分離しなかったことから誤用を犯したと思われるため、この種の誤用もまた言語間誤用と分類できると思料する。

7. 結論

本研究では、日本語学習に従事するイ

ラン人を対象としてアンケート調査の実施し、イラン人が日本語受身文を学習する上で陥りやすい誤用及びその用例に基づく分析・考察を行った。この中で、究明した誤用を8つのカテゴリに分け、そして、「言語間誤用」と「言語内誤用」に分類し、考察を行った。誤用の8つのカテゴリのうち、3つは言語間誤用、又は母国語の影響や干渉により生じるエラー、つまり「主語の位置で目的語を使用すること」「日本語の受身文における動作主の省略」「統語構造の使用に関するエラー」に細分した。残りの5つ、つまり「受身と自発の見分けに関するエラー」「受身と尊敬の見分けに関するエラー」「受身と可能の見分けに関するエラー」「助詞に関するエラー」「三項から成る受身文に関するエラー」は、言語内起源のエラー、すなわち、「目的言語の構造の複雑さに起因したエラー」、又は「不完全な学習に起因するエラー」に含まれた。

この研究の結果を踏まえ、イラン人学習者の「誤用」は、主にペルシア語からの負の転移によるものという、本研究の仮説に反する結果が得られたことから、イラン人学習者のほとんどのエラーは「言語内誤用」というタイプのものであり、目的言語の規則性を十分に認識していないために発生するという結論になった。日本語の受身文の複雑な構造は、学習者にとっての本領域の学習を困難なものとしていることから、究明された誤用を鑑みると、受身文の教え方には更なる見直しの必要性があるように思われる。最も頻度が高い一つの誤用として、「受身文と自発文の区別に関するエラー」が本研究にて明らかとなったが、しかしながら、現在の教育方法や使用されている教科書においては、これらの区別方法

に関してほぼ何も言及されていない現状となっており、教師が陥りやすい誤用に焦点を当てることで、教室での活動を設計し、そして適切な練習問題や教科書を提供することで、日本語の受身文と類似する文法構造との相違点を明らかにする必要があると思われる。また、日本語の受身文の特徴を強調するという方法を活かし、両言語の受身文の構造の違いを比較させるなどのアプ

ローチにより学習者に理解させ、ペルシア語受身文の先入観から少しずつ脱却させることが効果的であろうと思う。また、受身文を正しく使用するには、ネイティブスピーカーの視点や考え方、そして態度といった方向に思考を導いていくことが必要であると思われる。

参考文献

- Corder, P. (1967). The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5(4), pp. 161-170
- Dousti Zadeh, M. & Forghani, A. (2011). Error Analysis in Foreign Language Teaching and Teaching Translation. *Jornal of Foreign Language Research*, 1(2), pp. 47-66
- Igarashi, S. (2007). The indirect passive of Japanese and Persian. *Studies in Japanese language and culture*, (17), pp. 147-154
- Igarashi, S. (2008). The relations between a passive sentence and so-called causative sentence: comparison of Japanese and the Persian. *Journal of Iranian studies*, (4), pp. 1-16
- Igarashi, S. (2017) Misuse Analysis of the Japanese Passive by Native Speakers of Persian : A View from the Perspective of Acquisition. *Studies in humanities and social sciences*, (12), pp. 95-116
- Kamali, M. (2015). Analysis of Errors in the Use of French Prepositions by Iranian Learners. *Language Related Research*, 6 (4), pp. 229-249
- Keshavarz, M.H. (1999) *Contrastive Analysis & Error Analysis*. Tehran: Rahnama Press
- Mahootian, S. (1997). *Persian. (Descriptive Grammars)*. London: Routledg Press
- Masuoka, T. (1987). *The Grammar of Propositions*. Tokyo: Kuroshio Press.
- Moradi,F. (2009). *Analysis of Misapplication of the Passive Form by Native Persian Speakers While Learning Japanese [in Japanese]*. Master's theses. Hitotsubashi University
- Moradi.F. (2016) *Questionnaire Survey Based Analysis of Misapplication of the Passive Form by Native Persian Speakers While Learning Japanese. Journal of the study of Japanese language education practice* (3), pp.101-115
- Muraki, S. (1991). *Various aspects of the verb in Japanese*. Tokyo: Hitsuji Shobō Press.
- Noubahar, M (1993). *Persian Grammar In use*. Tehran: Rahnama Press.
- Suzuki, S. (1978). *Problems with Particles 1(Handbook of Japanese Language Education*

for Teachers 3). Tokyo: The Japan Foundation Press.

Teramura, H. (1982). *Lectures on Japanese Study 10: A Comparison with Foreign Languages I*. Tokyo: Meiji Shoin Press.